

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

■ 6回 ■ 国場幸房(建築家)

建物の形態は、その空間から生まれる

へ一九七〇年に日本万国博覧会が大阪で開催された。日本の著名な建築家たちも各パビリオンの設計に関わり建築界は華やいだ。沖縄では通貨の切り替え、国政参加や七二年の本土復帰と慌しく時代の変わり目に直面。復帰後の七三年には石油ショックと狂乱物価が日本列島に吹き荒れた。七五年の「海！その望ましい未来」をテーマに沖縄国際海洋博覧会が開催された。公共、民間など三千億円の投資の一大事業であった。〜

海洋博覧会が近づくにつれ、本土の著名な建築家の方々の来県も頻繁になった。私も、横さんをはじめ数名の建築家の方々と会う機会もあったが、博覧会場の仕事は現実的には東京の著名な建築家がメインになるであろうと予測された。ちょうど時を同じくし「ムーンビーチホテル」の構想計画が、海洋博のオープニングに間に合わすべく持ち上がっていた。かねがね、沖縄の観光産業の重要性を唱えていた国建の社長でもあった兄幸一郎は、ある成

り行きでムーンビーチを国建で購入していたようである。そこで三百〜四百室のリゾート施設の計画をするようにといわれた。私は喜びいさんで、直ぐ現場を見に行った。浜辺を抱く現在のムーンビーチの原形になるスケッチをした。ところが購入していた敷地は三千坪らしいことが分かり、スケッチの建物のほとんどが敷地からはみ出していたので落胆した。がっかりしていると、兄幸一郎が建物に合わせて敷地を広げると言い出し、最終的には二万千坪の敷地を確保することが出来た。

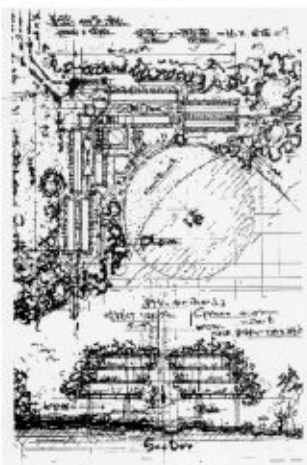


ムーンビーチから俯瞰した「ムーンビーチホテル」の全景
400mのピロティ空間をもつ

かねがね考えていた空間のイメージを盛り込んだムーンビーチの一／五〇〇のポリウム模型を作り、関係公的機関に説明をしてまわり、現実味を帯びて進んでいった。海洋博に負けない

ようなしつかりした建物をつくらうという意気込みがあった。しかしながら、いざその思いが現実のものになってくると、一抹の不安もよぎった、この計画への自分の考え方を確かめたく、初めての外国への視察を思い立った。兄幸一郎に「地球は丸らしいね」と言ったら、「あー、いいよ」とすぐ察してくれたので、そのまま二十日間の世界一周の一人旅へ出発した。ハワイ、アメリカ、フランス、スペイン、イタリアなどのリゾート地をまわった。

国や人種は違えども、人間の感情や思いは、人類すべて同じだという当前のことを身体をとうして実感しそれを認識する旅であった。このムーンビーチの設計は国際的にも、ある程度のレベルまで達しているとの思いを実感し勇気を出し、そのまま仕事を進めていった。心の片隅には完成したら、私の建築の恩師である大高氏にも何時の日か見てもらう事も意識の中にあっただ。



自筆のスケッチ

三日月のカタチをした浜辺から名づけられたムーンビーチ。その浜辺にたたずむと、沖縄の光や風を全身で感受することが出来る。ビーチをとりまく木陰を失いたくない気持ちでピロティの技法で再現することを思い立った。それは、

学生時代に八重山で見た、千本足のガジュマルの緑葉をいっぱい広げ、幾つもの幹がたくましく大地に根を下ろした、あの木陰の空間を建築的に具現化したものである。その木陰は亜熱帯の沖縄に涼風をもたらし、人々が憩える最良の空間になり得ると思った。ピロティは大地を失わずして建物を造る事が出来る不思議な建築の技法であり、海への風景の連続性を損なうことなく生かす事が出来る。ここでは、コルビュジェがよく用いた「ピロティ」が、時には、流行として捉えられているように思われたが、私はそれを建築の哲学として位置づけていた。私自身「建物の形態は、その空間から生まれてくるものであり、風土に合ったものをつくりたい」と考えている。



木陰を思わずピロティで憩う人々、子供に急かされて集まる大勢の家族づれで賑わっていた